

仏教輪廻説が現代社会で持つ意義

金剛大学校 仏教学科 教授
チェ 崔 ギ 箕 ビョ 杓

大正大学研究紀要 第一〇〇輯 特別号

1. 生死観不在から来る現代社会の病弊

2014年1月、鳥インフルエンザ（avian influenza）が全羅北道の高敞から流行し始めて、7月30日の時点でアヒル、鶏などの家禽類 1,390万羽が屠殺された。これらのうちほとんどは実際に感染したものではなく、他の地域に伝染するのを防ぐために予防的次元から埋められたのだった。これに先立ち、2011年には前年の冬から広がり始めた口蹄疫（foot-and-mouth disease）波動で牛や豚など 340万頭が屠殺処分されることがあった。これもまた半径3キロ以内にいた一、二頭の仲間が感染し、予防的次元から生き埋めにされたのである。家畜を家族のように思う畜産農家は悲しみ、埋葬作業に投入された人々は苦しみ、環境団体の会員たちは怒った。集団埋葬された家畜の死体から流れてくる悪臭のする浸出水によって周辺は汚染され、腐敗がさらに進むと、どのような結果にさらされるかも未知数である。

21世紀に入って韓国は自殺率が急激に高まった。2003年には大韓民国最大の財閥の一つである現代グループの会長だった鄭夢憲が、2008年には国民俳優と呼ばれた著名な芸能人チェ・ジンシルが自殺した。続いて、大韓民国を導いた大統領であった盧武鉉が退任わずか一年余りの2009年に崖から飛び降り自殺するという出来事まで起こった。自ら命を絶つという極端な選択をするようになるまで、当事者は多数の焦燥と苦しみを経験したであろうが、自殺は決して代案になるものではない。死に至るまで絡み合っていた周辺の状況は解決されるのではなく、しばらく覆われるだけで、家族と知人は大きな苦痛を経なければならぬ。特に有名人の自殺は、ウェルテル効果と命名された模倣自殺をはじめ、周辺にいくつかの陰鬱な結果を引き起こすことになるという点で社会的に大きな問題にならざるを得ない。

近年の韓国社会は非常に躍動的で明るさに満ちていた。国の面積は世界109位に過ぎず、人口は26位だが、国内総生産（GDP）は昨年基準で世界15位を記録している。韓国が六・二五動乱以降、わずか四、五十年で成し遂げた目覚ましい成長である。このようななかで、飢餓や貧困から来る苦しみにあう人を周辺で見つけ出すことは難しいであろう。しかし、人の生き様を内面へと覗き込むと幸せなだけではないようだ。人々の主な関心事は、異性間の愛、健康、目新しいことを求めようとする肉身の欲求を満たすための一次的材料にある。大衆歌謡やドラマは愛をテーマにしてこそ人気を得て、様々な大衆メディアのプログラムは、健康情報やグルメ情報であふれている。性スキャンダルや乱れた性生活が活況を呈していて、快楽を享受するために手段を選ばず、富を得ようとする。かくして、経済協力開発機構（OECD）の統計では、韓国は最高の自殺率と最低の出産率、そして幸福指数は34加盟国のうち33位となっている。基本的な衣食住は解決されているが、人生の目標と方法に何か間違いがあるのである。

今まで列挙したいくつかの問題は、外見上あまり関係がないように見える。しかし、筆者は、これらはすべて共通の原因から出ていると思っている。それは生死観の不在、あるいは誤った生死観に根ざしているのである。狭い意味での生死観は、死という事態がどのような状況と意味を内包し、後にどのような事へと展開されるかをどのように見るかということであろう。しかし、死についての見解というのは、どのように生きるべきか、人生の目的をどこに置くべきかということと結びつけて考えられるため、死生観は価値観、人生観、世界観なども包括し得る大きな概念である。

死とはすべてが消えていく無化の瞬間であるという考えであり、こうした「来生はない」、「死ねば終わりである」との見方を仏教では断滅論という。このように考える人であれば、上で列挙した事柄は、自分には直接影響すらも及ぼさないと考えるであろうから特に問題ではない。また、人が死んだ後も魂のようなものがあって天国や地獄で

永遠に生きるという見方を仏教では常住論と呼ぶ。このような見方をする人であれば獣の屠殺処分は大きな問題ではないだろうし、自殺や快樂の追求は神の意に反しさえしなければ悪ではない。しかし、人生というのは一度ではなく無限に繰り返しながら業に応じて六道を回り続けるという仏教的死生観の見地に立つのであれば、上で列挙したことがらはすべて間違っていることであり、自分にも社会にも苦痛をもたらす愚かな行動となる。このうちのどれであれ、死生観を持っていない人であれば、いのちはただ与えられたものに過ぎず、指向点や独自の判断基準なしに多数が行いただよさそうに見えるものだけを模倣しながら生きていく。

仏教の輪廻説は哲学的な縁起、倫理的な業報説と深く関連するが、非常に具体的であり、実用的であるため、理解しやすく生活に及ぼす影響力も非常に大きい。輪廻説があることで業報説と縁起説がより強力な意味を持って生活の仕方に明確な基準を提供することが可能である。それは、現代社会で起こる様々な弊害を防止、また解決できる素晴らしい死生観にほかならない。

2. 輪廻説を否定する風潮とその問題

一切衆生が三界六道を業にしたがってめぐりまわってくるという輪廻説は仏教が伝来して以来、長年にわたって私たちの思考体系と生活風習に大きな影響を及ぼしてきた。宿世・来生・奈落・阿修羅場・阿鼻叫喚・他界のように日常に使用される語彙や四十九斎・靈山斎のような遷度の風習など、いちいち列挙しきれないほど多くの文化が輪廻と直接・間接的に関連している。「前生にどのような業を行ったから……」と言って嘆いたり、テレビの芸能番組などで「来世にあっても、現在の配偶者と再び結婚すると思っているか」と出演者に戸惑わせる質問を投げかけることは私たちには多々起こることであるが、輪廻説に慣れ親しんでいない文化システムの中では考えられないことである。

しかし、最近になって輪廻説に疑問を抱く人々が大勢見受けられる。さらに仏教学者の中で輪廻説を否定したり、言及を避ける人々も少なくなく、仏教信行団体の会長や出家した僧侶すらも「輪廻を信じるのは難しい」と公言するのが実情である。どうして輪廻を疑ったり否定したりするのか。目に見えないからである。天上や地獄は見たことがなく、死んだ後、得られるという中陰身も経験したことがない。しかし、凡夫の目に見えないからといって信じないのであれば、それは、すでに宗教を持っているのではなく仏教を信じているのでもない。仏教を信じていないのであれば何の問題にもない。ただし、仏の子を自任しながら、あるいは仏教に友好と言いながらも輪廻説だけは信じがたいという態度が問題になるのだ。どうしてこうであるのか。

『中阿含』44巻に掲載された『鸚鵡経』は釋尊が鸚鵡というバラモンに輪廻について詳細に説いた経典として有名である。釈尊は、この経典で鸚鵡の家で飼う犬の前生は彼の父親だったという事実を躊躇いながらもそれを知らせ、怒って信じていない鸚鵡にどのような業に応じてどのような果報を受けるのか詳しく説いて、彼を納得させるのである。この経典は「分別善悪報応経」という単一経典としても翻訳されている。『長阿含』『世記経』は三界六道の姿とそこを輪廻する衆生に対して、釈尊が非常に詳細に説明している経典である。また、輪廻を信じていないバラモンに鳩摩羅迦葉が、いくつかのたとえを用い輪廻が事実であることを説明する『長阿含』7巻の『弊宿経』も輪廻説が単に譬喩や寓話ではないことを示す経典である。釈尊が自分を生んだ後、命を終えた摩耶夫人のために忉利天に登って説法した「増一阿含」28巻の「聴法品」や釈尊を殺害しようとして失敗した提婆達多がすぐに地獄に落ちたことを説いている47巻「放牛品」の記述も六道輪廻を前提としていてこそ、その内容が展開されるのである。釈尊の直説という阿含経典だけ見てもこのように輪廻と直接・間接的に関わる内容を無数に見つけることができる。輪廻説を信じていないのであれば、これらの経典はフィクションであるか、無知な衆生を教化するために寓話や喩えを説いたものとして受け入れざるを得ない。

では大乘経典はどうだろうか。天神が釈尊の法門を聞いて鉢盂を捧げる『大品般若経』、天上の世界を続けて上昇しながら、説法が行われる『華嚴経』、弟子たちに長い生を経て成仏することを授記する『法華経』、これらは天上の存在や内生を前提としなければならない内容である。また、ほぼすべての大乘経典に参席し、大衆として出現する天龍八部も六道輪廻と関連している。

論書の中で最も影響力の大きい『俱舍論』は「世品」「業品」「破我品」など輪廻を直接説明する品だけでなく、

全体九品の中で輪廻と関連していない品は一つもない。大乘仏教の百科事典と言える『大智度論』で説明するところの五趣と六道の違いや天神への詳細な解説、慈悲の心のために涅槃に入らず、体を変えて行きながら衆生を済度する菩薩の変易生死を明らかにする『成唯識論』などの内容もすべて輪廻と深くかかわっている。また、十二縁起を三世にわたる因果と解釈した説一切有部の論師や、生が変わる過程で前生と後生の間の連続性を説明するために、根本識（大衆部）、有分識（説仮部）、窮生死蘊（化地部）などを設定した各部派の論師、また阿頼耶識を仮立した大乘論師はすべて実在しない事態を前提にして激しく議論を行った結果にほかならない。

声聞乗と縁覚乗を修行してみて、最終的に到達する阿羅漢や辟支佛の境地は、輪廻から抜け出してもう死ぬ苦しみをこれ以上苦しまなくてもよいものとして説明されている。阿羅漢を遂げたときに説明される、決まってなされる文句は、「私の誕生は、終わった。…後世の存在を受けないことを自ら知っている（我生已尽。……自知不受後有）」と表現される。輪廻説を信じないのであれば、釈尊在世時の弟子たちは実在しない苦痛から抜け出し、虚構の目標に向かって修行し、道を成し遂げ、後世の仏子はこれらの阿羅漢を羅漢殿に祀って僧宝として礼拝する、奇妙なことを行っているのである。

輪廻説を否定する彼らの中には、縁起説や業報説だけでも十分に素晴らしい教説なので、あえて輪廻を介しなくてもいいと主張している場合もある。世界のすべての存在が分離された他人ではなく、互いに深く関連しており、善を行うと良い結果が、悪を行うと苦痛を伴う結果がもたらされるということだけでも、人々が他人に危害を加えずに平和で倫理的に生きなければならない理由がそこにある。しかし、世の中には善良な人々が苦勞し、邪悪な人々が豊かな生活をしている場合も多々ある。これを見て因果応報は真実ではなく、倫理的教訓に過ぎないと主張する人も少なくないのが現実である。これらは、現世だけを見ることから、こういう見方をするようになるのだろう。業の中には現生に果報を受ける順現業だけがあるのではなく、来生や三生以後に果報が現れる順生業と順後業もあることを知るべきである。つまり業報説は輪廻が前提になってこそ完結する教説なのである。たとえばアルファベットの中で、AとBを抜かして英語のスペルを書いたり、炭素（C）と水素（H）を抜かして化学的構成要素を論じたりすることができないことと同じである。

仏教にはいくつかの種類の戒律がある。出家者と在家者、小乗や大乘の修行者によって守らなければならない内容は異なるが、すべての部類に共通して適用できる基本的な戒めがある。十善戒である。十善戒は時代と場所を問わず、誰もが守るべき自然法としてなされてきたものなので性戒、総相戒などと定義されている。身業三つ、口業四つ、意業三つから成る十善戒の最後は、不邪見である。邪見の内容は、いくつかあるが、死ねばすべてのことが終わったと見る断見と死んだ後に魂があり永遠に生きていくという常見が含まれている。すなわち輪廻を信じるということは邪見を持つてはならないという戒めを守るということでもある。『大品般若経』など大乘經典で言う持戒波羅蜜の内容が十善であり、『華嚴経』では十地のうち第二の離垢地の修行が十善であることを明らかにしているので、輪廻を信じるとは六波羅蜜の中で持戒波羅蜜を実践することになる。また、邪見を持つてはならないということを積極的に表現したのが正見であり、これは八正道の最初に位置しているので小僧の基本修行道である八正道を実践することにもなる。

仏弟子になるということは三宝に帰依し、ひいては八正道、六波羅蜜などを実践するために努力することを意味する。しかし、輪廻説を否定するというのであれば六波羅蜜と八正道を実践しないことにとどまらず、長い生を重ねた修行の末に仏道を完成したブツダや聖人、そしてあらゆる経論で欠かせない教説を否定することになる。輪廻を肯定したり、疑うことは、各自が選択できる問題である。しかし、輪廻を信じないのであれば、それは仏教の基本的実践である六波羅蜜や八正道を行わないことであり、帰依の対象となる三宝すらも信じていないことを意味する。そのことを明確に知る必要がある。

3. 輪廻説を否定する論理とその問題

次に、このように様々な仏教経論に喩えや寓話ではなく、具体的な事実として明確に説かれている輪廻説を疑う理由は何だろうか。前述したように不可視というのが最も基本的な理由だが、ここにはさらにいくつかの追加される論理がある。

最初に挙げられるのは、輪廻説が科学と背馳するからだという理由である。輪廻を言うとき、まず前提とならなければならぬのは世界が六道と区別されるということである。仏教の世界観は、周知のように、三界六道説が基本軸をなす。大小乗の経論を問わず、世界を論じるときは、必ず三界六道、あるいは阿修羅を鬼道の一部と見なし五趣として分別する。これらの区分の違いは、俗諦なので別に問題にはならず、そのような存在が実際にあるのかというのが争点である。六道の中で人間と畜生は、私たちが経験的に実在を確認することができるが、天道、阿修羅道、餓鬼道、地獄道の世界（器世間）と衆生は、客観的に存在が証明されていない。しかし、これらが存在しないと主張することはできない。天体や地下世界は未踏の空間だからである。存在の証明は容易くできて、不存在の証明は宇宙全体を探るまでは不可能である。ネス湖のネッシー（Nessie）や他の惑星の宇宙人を目撃する者はいるが、明確に存在すると証明されていても、存在しないことを確信することはできないのと同じだ。六道が存在するかどうかは、明確に証明されてはおらず、決定的に語ることはできずと判断を保留するのが正しい態度である。

『長阿含』『起世経』や『俱舍論』『分別世品』などに出てくる仏教の宇宙観は非常に巨大でありながら、細部にわたって具体的に描写されている。このうち須弥山を中心に周辺に八山と海があり、四大州に人間が分布して住んでいるというのは、私たちが知っている科学的知識と背馳する。ただし、これが何を象徴しているのか、また、別の次元のことを共に描いているのかは不明である。それより須弥山の世界が巨大な水輪の上にあり、水輪は再び風輪が支えているということ、須弥山の世界が一つだけではなく三千大千に無限に拡張するという事は、どれほど驚くべき話なのであろうか。地球を大気圏が取り囲んでいるということや（地球上で観測すると地球は空気層によって支えられているのである）、宇宙が140億光年以上に無限に大きいのは、仏教の世界観と非常に似ているが、この事実が観測されてからわずか100年も経っていない。

また、地球内部にもまだあまり明らかになっておらず、地獄のような空間はないだろうと断言することはできないのも今の状況である。地球の半径は約6,400キロだが、私たちの科学技術で直接観察することができる範囲はわずか表面20キロ程度であり、内部の構造は地震波等を利用して推定しているだけである。しかし、気体や液体を通過しないS波（secondary wave）を介して、地球が均一な固体からなるのではなく、内部に液体や気体からなる層があることが確認されている。最近では、地球内部に巨大な海（buried oceans）が存在することをカナダのアルバータ大学の研究が発表した¹⁾。

天界は人間界と遠く離れていて確認できないにしても、そこに住む天神が人間界に近づいて来たとき、あるいは人間界と近くに住んでいる鬼のような衆生も観察されないことから、その存在は疑われている。これらの存在は、通常、移動速度が非常に速くなったり、微細な色法から成っており、肉眼で捕捉されないと説明されている。『大般涅槃経』『迦葉菩薩品』に放った矢を走って掴むことのできる人を例に挙げた後「地に通う鬼はこの人より速く、飛び回る鬼は、これよりもっと速い。四天王は飛んで空を飛ぶ悪魔よりも速く、太陽と月の神は四天王よりも速く、堅疾天は、太陽と月より速い」と説く内容がある。この经文の中に出てくる太陽と月の神（日月神天）を自然の太陽と月と見れば、月は公転速度が毎秒939メートルほどで、秒速340メートルである音速よりも速いので、鬼や四天王の移動速度がどのくらい速いのかは推して知るべしと言える。

死んだ後、次の体を受け取るまで持続される五蘊である中有（中陰身）も天神と同様に、微細な色法から成っており、一般人の目には見えないという。『俱舍論』『分別世品』によると、中有のような部類同士はお互いに見ることができ、天眼通を得た人も見ることができ、通常肉眼では見ることができないという。その理由は、これらが極めて微細（極細）であるためにそうなのだ。ここで微細であるということは全体的サイズが小さいというのではなく、これらを成している四大色法が微細であるという意味である。前述した欲界の中有は大きさが五、六歳の子供と同じであるという説明があるからである。すなわち、天神や中有のような存在が肉眼で観察されていない主な理由の一つは、それらを成している色法が非常に微細であり、低密度で構成されているからだと推測することができる。肉眼では見えない微生物が顕微鏡で観察されるように、これらも発展したツールの力を借りれば、観察することもあろう。世の中には私たちの目に見える存在よりも目に見えない存在がはるかに多い。釈尊も、すでにこれを言明しているところである。

形状を見ることができる衆生は爪の上にくっついているほこりみたいなものであり、形状が微細で見ることができない衆生は大地の上の土ほこりのように多い²⁾。

輪廻説を否定する論理として、これが仏教固有の説ではなく、インドに伝来されてきた思想が流入したからだとの見方がある。もちろん、輪廻説は仏教固有のものではない。ジャイナ教でも輪廻を信じており、古代ギリシャの哲学者の中にも輪廻説を主張する人がいたので、東西ともに輪廻思想はあった。しかし、仏教でいう輪廻は思想ではない。ブッダが自分の智慧で観察したことを説いたものである。衆生が輪廻するという事実は、ブッダだけが見ることができるのではなく阿羅漢に至った弟子たちも皆観察することができる。

阿羅漢（無学）の三明。……宿命智証通というのは様々な宿世のことを知っていることをいう。一つの生から百千万億の生を、成劫と壞劫の日に至るまで、自分と衆生が過去において名前が何であったか、どのように生まれたのか、性格がどうだったのか、何を食べ、どのような苦しみと喜びを受け、どのくらい生きたのか、……などをすべて知っていることを意味する。……生死智証明というのは清浄な天眼によってあらゆる衆生が、死ぬときと生まれるとき、美しい姿と醜い姿、高貴な姿と下品な姿、悪道に向かって行き、業のままに生まれることを事実のままに見るのである³⁾。

仏教の輪廻説が外部の思想に影響を受けたものとするのができないのは、現代の天文学者たちが、地球が太陽の周りを回っているというのがコペルニクスの地動説に影響を受けたからだと言うことができないのと同じである。

次に、輪廻説は仏教の主要な教説である無我説と背馳することから認められないという見方がある。これは、すでに長い間議論の主題として、既にさまざまな議論がなされているので、ここで長く説明する必要はなく、簡単なたとえで説明の代わりとする。通常、輪廻するとしたら、前の生命と後の生命の間に同一性を維持する何かが必要ならぬとする傾向がある。たとえば、ある演劇俳優が前の演劇では王の役割を引き受け、その後の演劇では奴隷の役割をした時、王と奴隷は着ているものと扮装が違うだけで同一の舞台俳優という点で同一性が維持されたと思うのと同じである。この時、演劇俳優に該当するものと想定されている代表的なものが、我・人・衆生・寿者と翻訳される四つのものである。このように前生と後生を繋ぐ何かを想定する理由は、前の存在と後の存在が時空間的に隔離されていると考えているからである。

しかし、輪廻説で前の存在と後の存在は、隔離されてはいない。生有一本有一死有一中有一生有一本有……と、外形だけがずっと変わるだけで同じ五蘊（厳密には、変化し続ける五蘊）が間隔なく引き続き相続されていくのである。まるで卵がオタマジャクシに、オタマジャクシがカエルに変化するときは、これらの間に隔離される過程はなく、両者の同一性を維持する別の存在を想定する必要がないのと同じだ。この過程で、中有という存在が凡夫の目に見えないので、前と後の生に間隔があると誤解をするのである。前述したように中有が見えないのは、それが微細な色法から構成されているからである。たとえば、一つの列車が同じ軌道を走り続けるが、洞窟に入るとしばらく見えないのと同じだ。自己同一性を維持しながら、自ら治めることができる能力を持った存在、すなわち、常一主宰の性質を持った存在として我ないし寿者はなく、主宰性がないため、輪廻の苦しみを避けられないというのが無我説の内容である。すなわち、無我であるゆえに輪廻して輪廻することから、無我を相互補完的教説として見るのがふさわしい理解である。

最後に、輪廻説が階級制度を強固にしようとする統治イデオロギー（Ideologie）として、階級の平等を説く教説とは背馳するという見方がある。カーストのような身分制度がある社会で下層階級が自分の卑しい身分が前生の悪業による当然の応報と思わせ、支配階級に対して反逆を図らないようにする運命論的教説であるとして輪廻説を理解しようとする。しかし、ここにも問題がある。

ある人が醜い容姿で、あるいは先天的障害を持って生まれたとしよう。このような痛みが発生した原因はどこにあるのだろうか。それが親や社会制度の間違いからなのだろうか。赤ちゃんの妊娠中に誤った食生活をした親や、劣悪で有害な労働環境を提供した社会にも誤りがありうるだろうが、それは根本的な原因とは言えない。親の外見が醜かったり、誤った食生活をしても、子供が美しく健康に生まれる事例も多くあるからである。

現代の科学者たちは、親から受け継いだ悪い遺伝子がある原因だと思いがちである。しかし、その人は、なぜ親の遺伝子の中でも、あろうことか悪いものを受け継いだのだろうか。ほとんどの遺伝学者たちはそれを「偶然」と説明するしかないという点で、先天的に生じた苦痛は自分自身を創造した神の御心だと信じているのと大差がない。先天的障害や苦痛が自分自身の意志と全く及びもつかない親、社会制度、神、物質に原因があるとすれば、彼

は自分の運命に何ら責任も権利もなくなる、このような見方こそ運命論と言うべきである。しかし、先天性障害や苦痛が過去の生に行った自分の業報のためだとするならば、自分自身は運命の主になり、今後の運命を徐々に修正していくことができるようになる。今回の生で改善させることもあり、あるいは次生で改善されることもありうる。記憶すらもできない前生の業をなぜ自分が責任を負うのかと問うことは、罪を犯した人が記憶喪失症にかかった後、拘束されたとき、なぜ身に覚えのない罪で罰を受けなければならかと抗弁するのと同じである。特定の条件を作ってしまう原因として特定の国、特定の親、特定の遺伝子を引き継ぐことは根本的には、自分の業による結果であると見るのが最も合理的で、運命論を打開することができる理論的基礎となる。

だからといって先天的障害や苦痛がひたすら当事者だけの責任であるとし、親や社会がその人を軽蔑したり、改善のために何の努力もしていないのは、共感能力が不足しているのである。ある人が悪業を犯したのは、彼が元々邪悪な性格の所有者であるためではなく、悪業が伴う苦痛を知らなかったため、つまり無明に覆われているからだと言明は説明する。無知な子供が間違いをしておかしたときにその子を叱るよりも、諭し、教えることが賢明な大人であるように、他人は彼を判断せずに、正しい努力を払うように導かなければならない。また、現在、幸福であったり、高貴な身分であっても悪業を犯したならば来生にはその境遇が変わりうることを悟り、善業を積んでそのような人に慈悲を施すように努力することが輪廻を正しく信じるときの正当な帰結である。

4. 輪廻説の価値と仏教学者の任務

輪廻説はブッダが衆生の生存の生き様を知恵の目で観察し、教えたものである。喩えや寓話、仮説や思想ではなく、現実をそのまま反映した教説と見なければならぬ。輪廻は大衆が日常的な五感で経験し、観察することができるものではないので、今のところは信仰や信念の領域に属する。しかし、輪廻が十分に合理的な教説と受け入れられれば生活の仕方や目的、教育や治療の方法が今とは違う方向に変わったり改善されたりすることが可能になると思う。

第一に先天的に持って生まれた形質や性格などの原因を累代にわたる過去生の業に求めるとするならば、治療や教育のパラダイムが変わる。前述したように、現在は先天的障害や病気について遺伝因子を主な原因とするきらいがある。しかし、前生の業が主な原因だとするならば、DNA の操作を介してこれを予防したり、治癒する方法は、新たな局面を迎える。たとえば、風邪をひいて咳をする患者に咳を緩和させる処方や手に汗が過度に多く分泌され不快感を訴える人に手の汗腺を防いでしまう治療が根本的なものでないように、DNA の問題は現象が現れる前のプロセスにすぎないと見ることになるだろう。原因不明の人格障害や精神的トラウマも現生のみを考慮して、物理的な治療方法を探し出すのではなく、座禅や前生の記憶などの療法で精神科的治療を兼ねる方向へと研究が行われるならば治療効果が倍加されるだろう。

教育も同じである。教育学界や心理学界では、個性の違いが現れるのが遺伝子のような先天的な要因が根本的な問題である、あるいは、環境のような後天的要因が根本的な問題であるといった議論を行ってきた。しかし、この両方を決定的要因として見ることは困難とする事例が近年にあった。生まれながら脳と脳血管などを共有した結合双生児（シャム双生児）である。イランのラダン、ラルレフビザニ姉妹は、遺伝子が同じ一卵性双生児という点で先天的要因と言われる DNA が同じで、また 24 時間一緒に生活するしかない運命という面で、後天的要因と言える教育や生活環境も同じ事例である。しかし、二人は性格と嗜好が違いすぎて、29 歳の 2003 年に分離手術を受けたが、二人とも死亡した。このような珍しいながらも不幸な事例を前に、米国の心理学者ジュディス・ハリス（Judith R. Harris）は、遺伝子や環境が個性を決定する決定的な要因ではないことを明らかにする本を書いた。しかし、『個性の誕生』（原題：No Two Alike、2007）というタイトルで翻訳されたこの本は、個性を決定づける根本的な原因を見つけるのには失敗したと思われる。もし二人の DNA が同じであっても前生に経験してきた業が異なれば全く別の人格体だという輪廻説を念頭に置いていたならば、二つの違いがあらわれる原因が社会のシステムにあるという曖昧模糊とした方法で説明しなかつただろう。このように先天的形質や性格を決定づけている根本的な要因がいくつかの生に跨る業を前提にしていたならば、前生の業を見出すための努力が注がれつつ、身に覚えのあるものをさらに強化し、間違っていた習慣は止揚する方向へと教育のパラダイムが変化するという結果をもたら

していただろう。

第二に輪廻を死生観に持つようになると、死という事件を眺める視点が大きく変化する。次にまた別の人生が待っていると信じるなら、今のこの人生に対する愛着と死に対する恐れが一層減少し、死をもう少し心安らかに迎えることができる。不老長寿のための空しい努力、本人と家族に精神的・経済的苦痛を抱かせる無意味な延命措置なども意味が薄れてくる。輪廻をすると考えると自殺によってすべての苦痛が終結するわけではなくなる。自殺は自分が責任を負うべき果報を回避するものであり、殺生罪のために、次の生をより大きな苦痛として迎えることになるのである。まるで苦痛をしばらく忘れるために睡眠薬を飲んで睡眠を求めるようなものだ。しかし、眠りから目が覚めると、苦痛がさらに増してさらにそれに頼るようになるだけでなく、睡眠剤服用による副作用まで重なる最悪の結果が彼を待っている。

第三に死を迎えるまでの人生を眺める視点、つまり自分の生活態度と周辺環境を眺める視点が大きく変化する。次の生が審判者である神によって左右される場合、善悪の基準は、神が定めた律法となる。「私以外に他の神に仕えてはいけない」といった律法を持った宗教であれば、他の宗教を排斥するようになり世界の平和を脅かす存在となる。次の生はないと考える場合、来生のための幸せの貯蓄である善業を積む理由が消える。法の網にかからなければ、犯罪を犯してもできる限り楽しい生活を味わいたい、後代に名を残すことに何の意味があるかと考えるだろう。

仏教の戒律は、殺生・窃盗・邪淫・妄言を禁じることが根本的な条目である。これは、国や人種、宗教を問わず、すべての人々がお互い害を及ぼさずに平和に暮らせることができる根幹となる。特に、他の大規模な宗教のように「殺人はいけない」ではなく「殺生してはいけない」とされていることに基づいて平和共存の範囲は、家畜や野生動物にまで拡充される。このような優れた戒律が、単に定言命法として与えられるものではなく、感性的に迫り、強い実践力を持つためには輪廻説の役割が非常に大きい。私が殺生したり、害を及ぼす生命は前述の経文が示すように、前生の私の両親、また親しい人だったりすることもありうる。動物虐待は私の未来の姿かもしれない存在に苦痛を抱かせるのである。このような考えが土台になったとしたら、口蹄疫や鳥インフルエンザが流行するとき大量屠殺処分という残酷な方法で対処することはできないだろう。ひたすら経済的論理がもたらす密集飼育のように家畜伝染病が大量に発生しやすい環境基盤を作ろうとしてもできないだろう。そして、私が再び生まれやすい環境になるためには、出産がさらに増えなければならないという点で、少子化問題の解決にも少し寄与することができる。

今まで見てきたように輪廻説が仏教教説に占める地位は非常に大きい。それを否定するなら、仏教の教義自体が成立しにくくなると言える。そして現代においても輪廻説の意味は非常に深い。輪廻説を正しく理解すれば、それは非科学的だとか、無我説と相反するとか、統治イデオロギーというくびきをおわせられることはないだろう。さらに教育や心理療法、新たな価値観の樹立など、様々な分野のパラダイムを変えることができ、科学の発展にも寄与することができる。そうしていくうちに、仏教を専門的に研究する学者たちが輪廻説に対して持つべき態度と研究方法が自然に導き出されることになるだろう。

まず最初に輪廻説自体を経論に立脚してはっきりと明らかにするべきだ。これまでは輪廻説を信頼できずに、昔の伝説や寓話のように軽く扱いがちであったが、六道がそれぞれ経論にどのように描写されているか、そこでの衆生や中陰身の存在はどのような特徴を持つのか、輪廻の過程や善・悪業の果報がどのような結果としてあらわされているかなどについてもう少し細かい研究が行わなければならない。

次に輪廻説を化石のように思わず、科学的知識と結びつけて実証的に理解すべきである。三界六道では、現在知られている宇宙と地球の姿をどのように解釈すべきか、現代の発達した科学技術で観察することはできないかなどが検討されるべきである。西洋でも前生や来生の存在を証明しようとする努力が少なからず行われてきた。死後生存の研究者としての評判が高い米国バージニア大学のイアン・スティーブソン (Ian Stevenson) は前生を記憶する事例を二千件以上レポートし、クリストファー・ベイチ (Christopher M. Bache) の『輪廻の本質』(原題: Lifecycles, 1998) やディーパック・チョプラ (Deepak Chopra) の『死後の生活』(原題: Life After Death, 2006) のような本は、前生と来生の存在について科学的、また客観的に明らかにしようと努力した力作である。しかし、これらは仏教輪廻説の内容を十分に熟知しておらず、輪廻の過程や原因について体系的理論を打ち立てるには不十分さが残る。さらに輪廻説は、科学理論に未知として残っている部分の補完に活用したり、新理論確立の手がかりを提供することもできる。

最後に、輪廻説を実証しながら、これを理解しやすく解説し大衆に広く伝える努力が必要である。世界が平和に共存し、善業を行わなければならない理論的基盤として輪廻説の右に出るものはない。仏教が研究室と学術書から抜け出し大衆社会のなかで実際に幸せに貢献できる方法を研究しなければならない。

註

- 1) BBC、2014.3.13. : <http://www.bbc.com/news/science-environment-26553115>
- 2) 『雑阿含』 16、442 経
- 3) 『雑阿含』 31、885 経